

第六十八回県短歌大会選考結果

特別選「雑詠」

伊藤 一彦 氏 選

◎天 位

静かなるけふの終りをふくらませ夕日ゆらりと窓辺に沈む

八戸 木立 徹

【評】その一日の終わりを「ふくらませ」としたところに気持ちがかもっていて、特色のある表現。字余りがなく調べがよい。

◎地 位

今日明日の境目にいる星を見て門限越えてる二人だけの夏

むつ 葛西美保子

【評】恋の歌として印象に残った。「今日明日の境目にいる星」と詠ったのがしやれていておもしろい。「星見つつ」とした方がよい。

◎人 位

木立みな夕焼けてをり戦ひの止まぬ地上の祈りのやうな

五所川原 山谷 久子

【評】人間社会の象徴のように燃えている木立。やや解釈が揺れるかもしれないが、その感慨を思い切つて詠んでいる。

◎秀 逸（5首）

新しき父に出遇える少年のまなこに光る夏の銀漢

十和田 中里茉莉子

百四となりし叔母上「ハグ」といふ言葉覚えて会ふたびハグる

黒石 摺 祐太郎

黒縁の眼鏡かければ黒樫の父に似るなり縁無し選ぶ

青森 泉 正彦

太宰一冊コーヒー二杯あればいい古里行きの三時間ちよつと

青森 郷 佳南

夕空に満月大きく照る象今日のひと日の褒美のごとし

黒石 加賀谷富美子

◎佳 作（15首）

ときたまは吾が身上を明かしつつ養護施設の子と歌詠みぬ

鶴田 棟方 文雄

土埃あびつつ新じゃが掘る畑に遠くねぶたの囃子聞こゆる

青森 安田 溪子

サービスと笑みて小さき墨くれし乙女の国に戦火狂へり

弘前 斉藤 純子

介護する夫の手をとり肩を抱く若かりし日には思はざりしよ

弘前 菊池みのり

平成の児童（こ）にハンコもらう朝日あび定年の夫とラジオ体操

弘前 三浦ふじゑ

行く筈の祭の囃聞こえ来ぬ娘がかけ来し電話の向こうに

弘前 山内悦子

ありがたうの心を置きて乗る夜汽車友は子の住む町へと発ちぬ

おいらせ 苫米地昭子

夕暮れの遺跡に奏でる笙の音は縄文の風をわが内に呼ぶ

十和田 関川八重子

りんご園にカラスの骸吊されて見せしめに揺れ満月（つき）に照らさる

弘前 林昭雄

新しき藁の上にて子牛らは無造作に四肢を延ばし眠れり

十和田 外山國男

農に生き一世終えたる叔父のもとへ鈍行は行く津軽ど真ん中へ

青森 志村佳

熊谷に大雪、つがるの出水には電話のわれと娘のあづましき距離

黒石 野呂さつよ

モーツアルト聞かせて冷蔵したるといふ如何なる味ぞ津軽林檎は

十和田 古舘千代志

迷わずに帰り来よとたく迎え火の向こうに今年も一歳の吾子

十和田 田村郁子

グッドバイの美学太宰は生きている岩木の峰に雲はたなびく

青森 田沢恒坊

被災地の海へつながる海峡の風に震えて咲く透し百合

むつ 高橋やす子

盆歌が風にきれぎれきこえきて玉蜀黍の茹であがりたり

六戸 古舘公子

雨のしづく振りてたためる秋草の模様傘に母をぞ偲ぶ

十和田 大野あつ子

終戦後勘当されし芝居人亡き骸葬る義妹の縁で

青森 工藤ちよ

にこにこ暮らしてゐるか亡母の声どこの路地にも立葵（コケッコ）

咲きて 青森 山本英子

宿題 A 「島」

弘前 原子 繁美

仲間ありて海は生きがひ 教へ子は海苔・牡蠣興す被災の桂島(しま)
に 弘前 田中 雅子

八年を箆筒にねむる大島紬ほのかに伯母の匂いを放つ

青森 今 貴子

一円玉四枚にぎり「よえんよえん」と唱える船の松島めぐり

十和田 佐々木愛子

麻痺の手のリハビリに成るブローチは大島紬の八重のはなびら

弘前 斉藤 純子

嫺やかに故郷の島のをどり舞ふ原色のやうに明るい友は

青森 風晴 景一

手のひらの凶の島紋消えいたり夫との一日笑顔ですごす

野辺地 作田 サキ

宇宙にも島があるなら行って見たしわが日常をするりと抜けて

十和田 小笠原さめ

小さき島の領有競う愚かさよ絶たれんにしえよりの絆も

野辺地 横浜 清司

封ぎれば潮の香たちくる蕪島の今年も届くクラス会通知

十和田 田村 郁子

原発の施設抱ける半島の道辺に群るる猪独活の花

むつ 高橋やす子

ひそかにも我には奢りカタクリの島にうぐひすの澄む声聴くは

木村 美映 氏 選
五十嵐敦子 氏 選
原子 繁美 氏 選

木村美映氏 選

◎推 薦 (5首)

島めぐるふたつのくにの艦のごともつれ合ひつつ蝶とびゆけり

つがる 中村 雅之

私のなかにも異界こつそりとランゲルハンス島に手をやる

青森 柴崎 宏子

戦死せし弟の骨を探すごと父はルーペに南の島見つむ

つがる 木村 茂子

頭などで島田結ふには打って付け祖母の声する髪梳くたびに

三沢 村岡 幸子

「黄金(こがね)で心を汚さなめで」と肝(ちむ)にしむ鳥唄うたひつ耐

へきし過去・いま おいらせ 日野口和子

◎佳 作 (20首)

スカッドの射程の距離に身を置きて列島はいま夏祭りに酔ふ

島唄のざわざわと寄せてくる八月今年も平和を祈る

青森 山本 英子

列島に家族みたりが住み別れ南みなみへと息が離りゆく

弘前 佐藤 啓子

酔うほどに湯ノ島近く見えて来て泳ぐと言い出す上司に揉（も）める

むつ 葛西美保子

石垣の友より電話くる夜の会話に海の鳴る音交じる

青森 加藤 洋子

麦わら帽にねむの花挿す島少女遠い記憶は夏に蘇る

青森 泉 正彦

チチカカの葦の浮島下り立てば足裏に鈍く湖水動けり

弘前 工藤 光子

せせこましき島国根性とき放ち意気やうやうと八十路坂越ゆ

中泊 中村 範彦

戻りきて扉を閉ざせばこの部屋は街の孤島となる 夜明けまで

青森 兼平あゆみ

戻りきて扉を閉ざせばこの部屋は街の孤島となる 夜明けまで

おいらせ 苦米地昭子

◎佳 作 (20首)

青森 兼平あゆみ

津軽とふ町並残る礼文島の雨に濡れゆく感傷めきて

青森 間山 淑子

この地球（ほし）の自然治癒力 冒されて小笠原（ボニン）の海に島育ちゆく

弘前 木村 健悦

スカッドの射程の距離に身を置きて列島はいま夏祭りに酔ふ

弘前 原子 繁美

小さな背に緑の島と椰子の木をのせていたつけ アロハの吾子は

青森 志村 佳

汚れなきもののみ生（あ）るる沼の上蝶の安らふ初夏の浮島

五所川原 野呂 富枝

青森 三嶋じゅん子

麻痺の手のリハビリに成るブローチは大島紬の八重のはなびら

弘前 斉藤 純子

五十嵐敦子氏 選

◎推 薦 (5首)

戦死せし弟の骨を探すごと父はルーペに南の島見つむ

つがる 木村 茂子

二カ月の時間をかけて日本列島花のたよりの明日は知床

十和田 馬場 有子
十和田 小山田貞子

宿題 A 「島」

知床の海埋めつくす流水のはるかに還らぬ国後の島

青森 齊藤 守

硫黄島の巖に群るる海鳥にここにて果てし御霊を憶ふ

平川 工藤 チェ

私のなかにも異界こつそりとランゲルハンス島に手をやる

青森 柴崎 宏子

朝市に久六島の大き栄螺青銅色の長き角もつ

弘前 中村あやめ

あくがれし時ありプリンス・エドワード島「輝く湖水」も虹の向かうに

弘前 菅原テツ子

利き腕の下北半島がっちり抱え込まれて反転危うし

青森 三嶋じゅん子

強風に煽られつつも羽ばたきす万の海猫島をゆさぶる

青森 大坂 克子

原子繁美氏選

島国に生れて純粹培養の民の外交こころもとなき

中泊 楢山 英子

◎推 薦(5首)

瀬戸内の島で暮らすという君に一緒に居たいと言えば良かった

島影だッ帰つて来たぞ日本へ引き揚げ船に聞きしは遙か

十和田 大野あつ子

青森 高橋 圭子

病得て学徒動員より帰りたる夫にふるさとの島影蒼し

つがる 兼平 一子

ルソン島に果てにし伯父のセピア色の遺影が今はその父母と並ぶ

弘前 赤坂千賀子

頭などで島田結ふには打って付け祖母の声する髪梳くたびに

三沢 村岡 幸子

歌好きの母の口ずさむ島唄をこの日も聞きて施設を出づる

青森 大里 啓子

星の下の小さな島の日の本は原発抱えふんばっている

十和田 星野 綾香

島流しになったようだと北の地に嫁ぎし友はその地を誇る

十和田 大野あつ子

麦わら帽にねむの花挿す島少女遠い記憶は夏に蘇る

中泊 中村 範彦

われ傘寿こんなに若き日もあった「島のブルース」踊りし二十歳

青森 川浪 祐子

列島の東に除雪機あらはれて雹掬るをり水無月の尽

五所川原 番場 輝子

◎佳 作(19首)

われ傘寿こんなに若き日もあった「島のブルース」踊りし二十歳

父島は風光明媚と帰還兵たりし父言いてテレビ消したり
五所川原 菊地 美絵

海の辺に母を葬むり被災地の島影いまだ原発揺れて
鶴田 棟方 文雄

拉致されし人らの夢に幾そたび浮かぶは美しき島国ならむ
青森 新山 魏一

今在るは佐渡島よりはろばると北の地に来し祖父のありしと
青森 佐藤 しげ

かたくりの咲く湯の島を登りきて汐風したし故郷ながむ
弘前 岡本 彩李

松島の喋り上手な船頭さん小島廻りの光景還る
青森 福士 和子

けふも載る身元やうやく判明の福島の人三年を泣きて
青森 佐藤ヨシミ

列島に冷夏の予告エルニーニョ心配あれどわれ農に生きる
七戸 大串 靖子

離島より朝一番の船が着き海鮮市場にはかに賑はふ
十和田 太田 弘子

梅干しの千の吐息をにほはせて母の庭先 列島は梅雨明け
弘前 横山 祥子

石垣の友より電話くる夜の会話に海の鳴る音交じる
六戸 古館 公子

父島の三ヶ月山に現（いま）残るとほき戦の大砲の跡
青森 加藤 洋子

生涯の歌の師二人それぞれに俘虜たりしソ連またレーテ島
青森 三浦美英子

福島に墨の塗られた地図帳を販売すると夜のニュースは
弘前 奈良 弘子

島唄のざわざわと寄せてくる八月今年も平和を祈る
青森 木村 美映

改憲になだるる列島旅にきて（九条守ろう）に君と署名す
むつ 葛西美保子

知床の遊覧船（ふね）より見放く国後は影ただあはく還らざる島
五所川原 山谷 久子

月一度給水船を待ち侘びぬ北の小島の若き日の父母
黒石 島田 興三

青森 宮川 雅子

宿題 B 「腕」

弘前 中村 キネ

佞武多絵の仕上げのまなこに墨をおく筆もつ腕(かいな) ふるえる刹那

十和田 中里茉莉子

身縄引く太き腕(かいな)の男らか「みちのく丸」に満帆の風

弘前 原子 繁美

しなやかな奉書の白さ乙女子のねふた太鼓を叩く二の腕

弘前 田中 雅子

八甲田の列なる峰を抱へつつ入道雲の腕もり上がる

弘前 須藤 邦夫

「永遠の0」に泪し帰り道余韻をかみしめ夫と腕くむ

十和田 佐々木せつ子

筋肉をきたえ二の腕引きしめる夏には着ようノースリーブを

十和田 佐々木愛子

頭の上に両腕翳(かざ)す万歳は 何やら寂し投降に似て

弘前 斉藤 純子

就活の子も二の腕に力こぶ盛り上げ神輿をかつぐ最終日

野辺地 五十嵐敦子

泣きじゃくるみどり児びたりと泣き止みて娘の腕は今ゆり籠となり

弘前 山内 悦子

漆塗る腕磨かむとひたぶるに生きたる父か享年二十九

青森 風晴 景一

初孫を抱けば三キロの新しきいのちの重み双腕に満つ

木村健悦氏 選

◎推 薦(5首)

手招きをしてわれを呼ぶ病む夫の腕の時計がするする動く

中泊 宮越恵美子

初ヒットに腕を高だか振り上げる負うて守りせし泣き虫の孫

青森 大坂 克子

がり版をカリカリ鳴らし教材をつくりし日の腕いまも疼きぬ

青森 加藤 洋子

我が腕に軽く危ふき命なり生後十日のみどり児を抱く

中泊 榎山 英子

日に焼けた腕に触れぬよう離れぬようわが二の腕は君のとなり

青森 志村 佳

◎佳 作(20首)

皺ばめる腕によつきりと出して見るこのちも何かを誰かを抱かむ

大の字に身を横たへて実すぐりの疲れの溜まる腕も眠らす
 十和田 馬場 有子

南部 八木田順峰

古家をば容赦なく毀すユニボの腕の不調和なる音響きてをりぬ

田舎館 佐々木鶴池子

両腕に幼き我らをぶら下げてメリーゴーランドと父は回りき

弘前 堀内 育子

しなやかに曲げて伸ばして腕そろふ夏の盛りをきらら踊り手

青森 柳谷 陽子

サンドバック振り子のやうに揺らしるる曾孫(ひこ)の諸腕日々に逞し

黒石 摺 祐太郎

古い猫はいまだ目覚める気配なく枕代わりの腕が痺れる

青森 木村 美映

重い鍋ひよいと持ち上げ調理するコックの子の腕太くなりたり

深浦 佐藤 宏子

ぎつちりとバトンを握り腕を振り運動会の子等地球蹴つてゆく

十和田 芳賀裕美子

わが腕の中にて孫は口すぼめ手足伸ばして湯に浸りみつ

青森 山本 透青

「永遠の0」に洩し帰り道余韻をかみしめ夫と腕くむ

十和田 佐々木せつ子

がり版をカリカリ鳴らし教材をつくりし日の腕いまも疼きぬ

青森 加藤 洋子

五歳児よりとどく似顔絵けふ初めて細き腕(かひな)が描かれてありぬ

むつ 立花 恵子

◎佳 作(20首)

佞武多絵の仕上げのまなこに墨をおく筆もつ腕(かいな)ふるえる刹那

十和田 中里茉莉子

八甲田の列なる峰を抱へつつ入道雲の腕もり上がる

弘前 須藤 邦夫

騎馬戦の女将を乗せて組む腕の鞍しなやかに決戦を待つ

青森 佐藤 しげ

頭の上に両腕翳(かざ)す万歳は 何やら寂し投降に似て

弘前 斉藤 純子

猫に出会い友だちに会うウォーキング朝の畦道腕振り歩く

十和田 福井 元子

力こぶ盛りつとできる太き腕を道具となして農に生きおり

十和田 小原守美子

間山淑子氏選

◎推 薦(5首)

皺ばめる腕によつきりと出して見るこののちも何かを誰かを抱かむ

弘前 中村 キネ

根回しの利きてこゑなく末席に君組む腕は多くを語る

青森 齊藤 守

腕くみしことなきを言ひはにかむも媼は確と夫を支へぬ

黒石 野呂さつよ

古家をば容赦なく毀すウンボの腕の不調和なる音響きてをりぬ

田舎館 佐々木鶴池子

二の腕より太きズッキーニ横たはり出番待ちをり夕づく厨に

弘前 佐藤 啓子

古い猫はいまだ目覚める気配なく枕代わりの腕が痺れる

青森 木村 美映

棟梁の腕に惹かれてわが家の大きな決断ひとつするなり

十和田 星野 綾香

愚直なる夫に似合ひし赤銅の腕は二人の宝物なり

おいらせ 齊藤三千代

園児らの「ヨサコイソーラン」に拍手する小さき腕のリボンがうごく

深浦 渋谷真佐江

血筋とはいやなところも似るものか腕の太さは母ゆずりです

青森 今井 邦子

右腕の血管に刺す注射針静かに吸ひ上ぐ血流見詰むる

弘前 ふじさのりこ

車椅子の友の右腕健在なり腕相撲する力湧きくる

弘前 中村あやめ

その腕で砲丸投げした老母は「またね」の握手が今でも痛い

青森 三嶋じゅん子

少女の日習ひしピアノの指づかひ腕を交差し弾きたるソナチネ

青森 竹洞 早苗

茨木童子の腕むくむくと起きあがるねぶた太鼓に我取り戻す

青森 田沢 恒坊

平井軍治氏選

◎推 薦 (5首)

皺ばめる腕によつきりと出して見るこののちも何かを誰かを抱かむ

弘前 中村 キネ

日に焼けた腕(かいな)をくぐりぬけてゆく風は秋色知らんふりして

八戸 木立 徹

新米のママの腕は新しきいのち育くむゆりかごとなる

十和田 生出 頼子

根回しの利きてこゑなく末席に君組む腕は多くを語る

青森 齊藤 守

野次馬になりて風よけ歩みきて夕べなにかを逃(のが)すわが腕

五所川原 山谷 久子

◎佳 作 (20首)

突きあげし腕にもふりて打つあられ岬のはなの原発のデモ

頭の上に両腕翳（かざ）す万歳は 何やら寂し投降に似て
つがる 中村 雅之

弘前 齊藤 純子

腕白小僧気どりにて緑の葱坊主朝の畑にわれを待ちおり

十和田 罇 陽子

子育ても仕事も介護もせし腕を三十一（みそひと）文字に癒しをりたり

弘前 山内 聖子

大の字に身を横たへて実すぐりの疲れの溜まる腕も眠らす

南部 八木田順峰

日焼けした腕の皮など剥いでいた幼年時代の永遠の夏

青森 柴崎 宏子

両腕を天に突き上げ何怒る野良着姿の夫婦（めおと）の案山子

十和田 田村 郁子

しなやかに曲げて伸ばして腕そろふ夏の盛りをきらら踊り手

青森 柳谷 陽子

出し投げを鮮やかに決め優勝の白鵬関の腕の力

十和田 大野あつ子

両腕に夫を抱きて来たりけりひぐらしの声ひびく山墓

つがる 兼平 一子

高窓に右手（めて）左手（ゆんで）でて青年が腕の力にて顔を覗かす

弘前 工藤 光子

老い猫はいまだ目覚める気配なく枕代わりの腕が痺れる

碁敵の腕上げおれば揺さぶりは「困った困った」しきりに溢（こぼ）す
青森 木村 美映

青森 泉 正彦

腕によりかけ作らんと張り切れる妻の料理ぞ腹減らし待つ

五戸 吉田 晶二

両腕に溜めてこころは解き放つ高く遠くへ飛ばす白球

八戸 佐々木千絵子

生れし家の中庭にたつ腕木門母亡き後は閉ざされしまま

平川 工藤 チエ

血筋とはいやなところも似るものか腕の太さは母ゆずりです

青森 今井 邦子

日に焼けた腕に触れぬよう離れぬようわが二の腕は君のとなり

青森 志村 佳

その腕で砲丸投げした老母は「またね」の握手が今でも痛い

青森 三嶋じゅん子

まだ太き腕にすがりてゆく山に夏と闘う千本の樵

青森 川浪 祐子

席題「雲」

八戸 松尾 タイ

夕暮れて白黒朱と雲の色秋へと向かう心揺れをり

青森 伊藤 愛理

息をのむほどの茜雲「お元気ですか。」亡母（はは）への手紙空に書きをり
おいらせ 日野口和子

日の昇る気配の空のしんとして雲と向きあう透明な時間

青森 野村優美子

始まりはとても小さな水の滴わが胸に重く雲の広がる

青森 志村 佳

三川 博氏 選

◎推 薦（3首）

・天 位

世の愁ひ空に吸ひ上げ漂へるぼわりぼわりと雲

風まかせ

八戸 木立 徹

・地 位

綿飴雲ソフトクリーム雲と名付けらるて幼き日のわれは腹減らしをり

弘 前 中村あやめ

・人 位

雲一つ流るる今日の青天に姑の法要つつがなく終ふ

青森 安田 溪子

◎秀 逸（5首）

乙女子の泪の粒でできている雲やもしれぬふわりたおやか

◎佳 作（15首）

空を覆ふ黒雲に安堵する朝炎暑の畑土に雨を降らせて

青森 鹿内 伸也

「秘密・武器・集団」の文字横行し美しき国の雲行き怪し

弘 前 岩間 甫

台風の黒雲疾（はや）き空にらみ友はりんごの収穫急ぐ

青森 山本 透青

岩木嶺の吐息のような白い雲夏を攫って流れてゆくよ

青森 今 貴子

秋雲が空に作りしゆがみ顔変化は早しもう笑い顔

十和田 佐々木愛子

許すまじ未だ闘志の残りゐてむらむらと湧く雲仰ぐなり

弘前 菊池みのり
すつきりと見ゆるはたのし術後の眼に真綿のごとき白雲動く

工藤せい子氏選

◎推 薦（3首）

・天位

積乱雲雷を走らせ豪雨（あめ）降らせあまたの人の命奪はる

一夜さをあばれ太鼓に興じたる雷去りて白き朝雲

中泊 宮越恵美子

弘前 中村 キネ

入道雲綿飴みたいモクモクと夏を感じるわずかな季節

・地位

弘前 横山 祥子

「秘密・武器・集団」の文字横行し美しき国の雲行き怪し

高原の澄みわたる空につなぎトンボの悠悠睦めり高き鱗雲

弘前 岩間 甫

青森 佐々木勢子

・人位

あの雲は孫の笑顔によく似てる入院中の甲府の空思ふ

熊の古道八十路の足にて登りきてみさける空に夏の雲わく

深浦 渋谷真佐江

おいらせ 苔米地昭子

あの日より六十九回目の夏雲に平和の二文字がかすみて浮かぶ

青森 今井 邦子

◎秀 逸（5首）

暗ぐらと広がる雲のキャンバスに明日の希（のぞ）みを描く夕虹

雨晴れし空に白々と雲の帯死刑執行されたる正午

弘前 木村 健悦

五所川原 野呂 富枝

来る雲に春の声あり湖の面に白雲の花ゆらりと咲かす

雲一つ流るる今日の青天に姑の法要つつがなく終ふ

十和田 古館千代志

青森 安田 溪子

やうやくに立ち直る吾か逝く夏の雲のやさしきフォルム仰ぎて

無気味なる雲の居座る列島に集中豪雨の惨極まれり

青森 竹洞 早苗

弘前 堀内 育子

日の昇る気配の空のしんとして雲と向きあう透明な時間

青森 野村優美子

元気のいい入道雲に会えずとも稲田は確と黄金になりゆく

◎佳 作(15首)

青森 川浪 祐子

五所川原 吉田 勇蔵

甲田嶺(ね)は白き夏雲見はるかす稲田さやさや穂をはらみたり

弘前 原子 繁美

入道の雲に沁みゐる十六の時に哭きたる大君のこゑ

黒石 摺 祐太郎

かなかなを聴かぬこの夏あやしむにいつしかなびく行き合ひの雲

弘前 田中 雅子

沖を行くジュゴンの群れは藻場を捨て辺野古の空に雲湧き上がる

青森 木村 美映

過積載の狂気の船に乗り合ひて散りし命を哭けや雲鳥

青森 佐藤 しげ

黒雲の流れるヒースの丘に立つ「嵐が丘」の激情怖し

青森 佐藤 東

風のまにまに大空をゆく流れ雲宿痾の兄の窓にかがやけ

野辺地 五十嵐敦子

弱音など吐くまじわれはわれなりと空ゆく雲に叫ぶ土手原

五所川原 山谷 久子

雲ひとつなき朝の空昨夜(よべ)の夢はふりきりシートをぴんと展ぐる

青森 蛭名 洋子

うらうらと心を種に歌ふときみ山に美(は)しき雲たたなづむ

弘前 藤田久美子

加藤捷三氏選

◎推 薦(3首)

岩木山の雄姿訪ねし火野正平三度目もまた雲にかくれし

弘前 山内 悦子

・天位

帰られぬ道とは知らぬ雲ひくき山辺の施設に母の手を引く

青森 齊藤 守

すつきりと見ゆるはたのし術後の眼に真綿のごとき白雲動く

中泊 宮越恵美子

・地位

雲の上の存在である伊藤一彦の講演もうすぐここに始まる

十和田 馬場 有子

かぎりなく雲のうえなるこの人に出会わなければわが短歌(うた)はなし

十和田 星野 綾香

ひと刷けの雲添えて円き月のぼり眠りに惜しき窓の辺に立つ

・人位

沖を行くジュゴンの群れは藻場を捨て辺野古の空に雲湧き上がる

青森 木村 美映

かなかなを聴かぬこの夏あやしむにいつしかなびく行き合ひの雲

弘前 田中 雅子

拉致思ふ残酷非道許されじ親の暗雲狂ふがごとし

青森 新山 魏一

台風黒雲疾（はや）き空にらみ友はりんごの収穫急ぐ

青森 山本 透青

ひつそりと動かぬ池に雲浮きてその雲よりもうすき昼月

弘前 斉藤 純子

満月は碧き雲間に見えかくれ露天の湯舟にわれと揺れおり

十和田 佐々木せつ子

沖縄より徐徐に北上オスプレイ鱚雲裂くペラと爆音

弘前 長利 冬道

雲ひとつなき朝の空昨夜（よべ）の夢はふりきりシートをぴんと展ぐる

青森 蛭名 洋子

雲の峰危うき世情に光（かげ）おとし未来への息吹われにつなぎぬ

十和田 罇 陽子

鱚雲に大漁を懸け漁をせし伯父も逝きたり凌霄花（のうぜん）の咲く

青森 大坂 克子

ひぐらしの鳴き交ふ峡（かひ）の夕焼けをひとすぢ伸びる飛行機の雲

南部 八木田順峰

暗ぐらと広がる雲のキャンパスに明日の希（のぞ）みを描く夕虹

弘前 木村 健悦

無気味なる雲の居座る列島に集中豪雨の惨極まれり

弘前 堀内 育子

「死なないよ」言ひつつ十日後逝きし甥雲脚早き夏の終りに

つがる 成田 みつ

◎佳 作（15首）

自分から脱け出したくて旅に出る初秋の雲をどこまでも追ひ

十和田 中里茉莉子

車椅子押しておされて散策のさつきの空にわた雲二つ

青森 尾野 黎司

バックビルとなりて雷雲立ちつづき広島を襲ひ流せり

青森 間山 淑子

百日紅咲く裏庭に友おもふ病みて会ひ得ぬ雲多き夏

青森 加藤 洋子

甲田嶺（ね）は白き夏雲見はるかす稲田さやさや穂をはらみたり

ひと刷けの雲添えて円き月のぼり眠りに惜しき窓の辺に立つ

五所川原 吉田 勇蔵
弱音など吐くまじわれはわれなりと空ゆく雲に叫ぶ土手原

五所川原 山谷 久子

雨雲を見あげて晴るる日を待てり男爵芋の土に実れば

中泊 檀山 英子

沖を行くジュゴンの群れは藻場を捨て辺野古の空に雲湧き上がる

青森 木村 美映

模造紙に海と雲描き掲げたり家族の合作納涼の会

青森 泉 正彦

山下正義氏 選

◎推 薦 (3首)

・天 位

野分明け道の窪みの泥水に清く真白き雲ひとつ浮き

青森 宮川 雅子

◎佳 作 (15首)

秋海棠のうす紅の花咲くごとく夕ぐれの雲は秋告げる色

十和田 疇 恵子

・地 位

ころころとじゃがいもは小玉掘りをればたちまち暗き雲は雨呼ぶ

弘前 須藤まさえ

久びさに帰るわが国雲間より望めばこぼるる熱き泪が

十和田 小山田信子

八甲田の夕日に輝く雲見んと連峰見ゆる公園に行く

十和田 宮原 久美

・人 位
パパとママのかけ橋となれよ女孫二人 J A L 2 1 6 4 便は雲間に消えぬ

むつ 中村 笄子

沖縄より徐徐に北上オスプレイ颯雲裂くペラと爆音

弘前 長利 冬道

「おい雲よ」呼びかけるような呑気さが今の私に足りないみたい

青森 柴崎 宏子

◎秀 逸 (5首)

「秘密・武器・集団」の文字横行し美しき国の雲行き怪し

弘前 岩間 甫

無気味なる雲の居座る列島に集中豪雨の惨極まれり

弘前 堀内 育子

白雲を綿菓子をやうと言ひし孫弾む会話にこころ安らぐ

青森 大里 啓子

積乱雲雷を走らせ豪雨(あめ)降らせあまたの人の命奪はる

弘前 横山 祥子

席題「雲」

車椅子押ししておかれて散策のさつきの空にわた雲二つ

青森 尾野 黎司

百日紅咲く裏庭に友おもふ病みて会ひ得ぬ雲多き夏

青森 加藤 洋子

爆撃は記憶の初め雲さへも焼きつくして空に紅蓮の炎

南部 佐々木 冴美

かぎりなく雲のうえなるこの人に出会わなければわが短歌（うた）はな

十和田 星野 綾香

し
夏草を刈り終え帽子手にとれば積乱雲の湧きあがりくる

中泊 中村 範彦

シャボン玉雲に乗りガザにとんでいけ空いっぱい吹き幼は遊ぶ

十和田 芳賀裕美子

秋空にうすく広がる雲流る大根植へし山の畑に

青森 一町田知子

元気のいい入道雲に会えずとも稲田は確と黄金になりゆく

青森 川浪 祐子